20　官女置物

旭玉山

一点

明治三十四年（一九〇一）
牙彫
三九・〇×五一・〇×五九・〇

垂髪に十二単の装束を身につけた平安時代の官女が、鏡に映る顔に見入る姿を彫り表した牙彫の作品。衣紋を浮彫で表し、檜扇の糸飾りなどを細密に彫り表しており、鏡面には鏡に映し出される女性の顔を線刻で表現するなど、写実が極められている。制作に際しては帝国京都博物館に陳列された下鴨神社ゆかりの装束などを参考にしたと伝えられる。作者の旭玉山（一八四一～一九二三）が得意とした髑髏の作品と、本作を並べることで「朝に紅顔あって世路に誇れども、暮に白骨となって郊原に朽ちぬ」の無常観を示す意図があるという。明治の牙彫は象牙の丸彫を基本とした作品が多く、象牙の大きさによって作品の大きさも限定されるが、本作は径が四寸八分（およそ一四・五㎝）、重さが三十八斤と三十九斤（およそ二三㎏）の二本の象牙から切り出した部材を、木理の違和感なく幾つも寄せて大作に仕上げている。組み上げや固定には、釘やネジが多用されているように見受けられる。本作は明治三十三年（一九〇〇）のパリ万国博覧会へ出品のため農商務省の補助を受けて同三十年より制作が始められたが、原型制作に一年近く、牙彫に二年あまりを費やしたため完成が間に合わず、明治三十四年の日本美術協会美術展覧会に出品された。精巧かつ牙彫の大作として特別金牌を受け、宮内省の買い上げを受けた。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治美術の一断面――研ぎ澄まされた技と美
三の丸尚蔵館展覧会図録No.82

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成三十年十一月三日発行

© 2018, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan